



口絵1 第1巻 (40.4 × 1410 cm) 9月1日関東大震災の発生を、作者白洞は仏神の怒りとして描き起こす。



口絵2 第1巻は不動明王の射る火矢、眷属の投げる火の付いた輪宝が逃げまどう人々に取り付き、家が焼け、人々に降り懸る惨劇の数々が描かれる。



口絵3 第2巻 (40.4 × 1510 cm) 風向きで刻々に変化する火先を避け、人々はなおも逃げつつ、水と食を求める。戒厳令(9月2日)が敷かれ、軍隊が出動。火災が収まり(9月3日朝)、漸く仮小屋に寝泊りする安堵の表情を得た人々が描かれる。



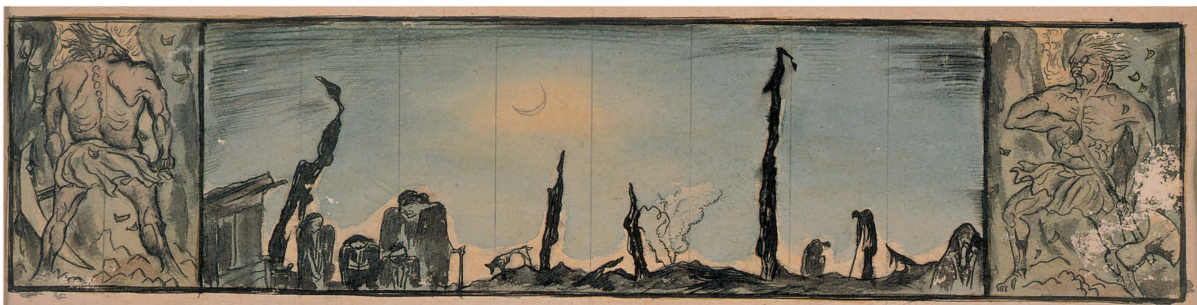
口絵4 第3巻 (40.4 × 1230 cm) 東京市における震災の最大の悲劇の場、被服廠跡で四十九日の法会が営まれる場面で絵巻が閉じられる。



口絵5 池田遙邨「震災の跡」 1924年，インク・紙，19.0 × 28.5 cm（倉敷市立美術館蔵）



口絵6 池田遙邨「災禍の跡」 1924年，絹本着色，6曲屏風1隻，167.0 × 375.0 cm（倉敷市立美術館蔵）



口絵7 池田遙邨「災禍の跡(画稿3)」 1924年頃，紙本着色，8.5 × 36.4 cm（倉敷市立美術館蔵）



口絵 8 西澤笛岫「黄昏るゝ頃（日本橋）」36.0 × 27.0 cm



口絵 11 田村彩天「夕陽に映ゆる女神像（神田仏英女学校跡）」37.3 × 27.0 cm



口絵 9 磯田長秋「運送馬車（京橋通）」27.0 × 37.0 cm



口絵 12 桐谷洗鱗「西郷の銅像（上野公園）」37.5 × 27.0 cm



口絵 10 川崎小虎「宮城前天幕村」27.0 × 36.0 cm



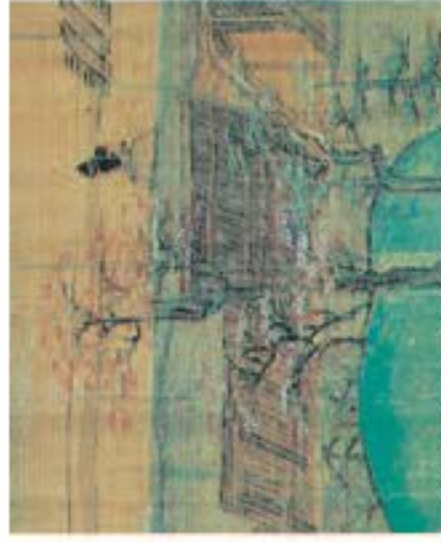
口絵 13 【巻五第四段】香草色の常陸。秋意は極やく巨住呂現境面（口絵 14）へ展開する。弘安四年（1281）の記録がないことから、常陸と巨住呂現境面の間に当府連続の境面があったのではないかと考えられている。世帯では、香草色から伝草色に変わるのは、前巻と後巻に秋意を二つに分けて描いているものと推察する。



口絵 14 【巻五第五段】巨住呂現境面で、一述・時季が秋惟北条時宗と対面し、鎌倉入りを阻止される。物語後半の勢まりと推測する。鎌倉入りは阻止されたが、一述の勇気ある行動が鎌倉のひとびとに受け入れられる。画面左端は、一述とがもてなしと受けける様子で、後の伝（口絵 15）が、緊張と安堵の両意二つの境面展開を示す。



口絵 15 【巻五第五段】巨住呂現・拡大部分。後の伝は、濃くぶらという一述の気持も表す。



口絵 16 【巻五第五段】巨住呂現・拡大部分。口絵 16・17 は、一述と北条時宗が対面する事前に描かれている。鎌倉入りの結果により、念仏宗教存続の是非を一述は描いていた。神土の奉役である伝は、阿弥陀如来の視点とも異なり、この境面を見守る。



口絵 17 【巻五第五段】巨住呂現・拡大部分。

口絵 13~17 『一述要法』(兼光考案)  
(平成 14 年の修理前の写真を一割使用した)